

## “ 遠人 ” 愛

牧師 山本 護

「国家とは、あらゆる冷やかな怪物のなかで、最も冷やかなものである。それはまた冷やかに嘘をつく（『ツァラトゥストラはこう言った [新しい偶像]』ニーチェ）」。

ツァラトゥストラは、冷やかに嘘をつく国家を述べた後、生命のことも語ります。「かつてもろもろの民族を創造し、その頭上にひとつの信仰、ひとつの愛をかかげたのは、創造者たちであった。このようにして、彼らは生命に奉仕したのだ」。

ロシアによるウクライナへの武力侵攻、そして結束して制裁をしかける欧米諸国。我が祖国もこうした冷やかな怪物どもに連なっています。生命に奉仕する教会は、世にあって怪物の部位なのでしょうか。「ひとつの信仰、ひとつの愛」をかかげて怪物を横断するイエスの弟子は冷やかであってはならぬ、とツァラトゥストラに喝破してもらいたい。

イエスはこう言った。「あなたがたも聞いているとおり、〔隣人を愛し、敵を憎め〕と命じられている(マタイ5:43)」。怪物どもの支配領域では、政治家や批評家、あるいは伝道者までもが「畜群(同書の表現)」の暗い憎しみに応えて冷やかな隣人愛を説く。そこからイエスはさらに語ります。「しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである(5:44~45)」。

冷やかな怪物は愛されることを嫌います。祈られることを拒み、私たちが父の子となることを警戒します。愛され祈られると、冷やかでいられなくなってしまうのか。この緊迫した日々、愛し、祈り、自分の十字架を負ってイエスに従って行きたい(16:24)。

ツァラトゥストラはこう言った。「わたしの兄弟よ、あなたに先立って進んで行く幻影は、あなたより美しい。なぜあなたはこの幻影にあなたの肉と骨を与えないのか？だが、あなたは幻影をこわがって、あなたの隣人のところに走っていく(同書 [隣人への愛])」。

未知の可能性たる明日を恐れ、分りきった隣人に拘泥する者を、ツァラトゥストラは「隣人の錯誤によって自分自身に鍍金(メッキ)をかけようとするのだ」と言い当てました。そして「わが兄弟よ、わたしはあなたがたに隣人への愛を勧めない。わたしはあなたがたに遠人への愛を勧める」と結びます。

危機の日、イエスを愛し教会を蔑視したニーチェ兄貴に手ほどきされて、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」という「遠人愛」を噛みしめました。若い頃に読み、ある必要から岩波文庫で買い直した『ツァラトゥストラはこう言った(上)』、定価はなんと360円。観念的な青春期にはこれほど明瞭で現実的な書物だとは思いませんでした。あの頃よりも今の方が、先立って進む幻影に肉と骨を感じています。Ω

